

馬の飼立、仕込様附騎射の事

平和な世が長く続いたことから、華美の風も益々盛んである。華美が盛んになって、士風は懦弱^{だじやく}である。こうして後、武芸は地に堕ちて古の儀を忘却^{いにしえ}してしまった。中でも馬は武士の足である。十分に熟達していなければならない。昨今は世の中の華美に流されて、馬の飼い方も上品になったので、第一に馬が弱い。もつとも乗る人もその真の技術を身に付けている人は少ない。現代も諸大名の家々に軍役の規定があり、人々は馬を保持しているはずなのだが、規定どおりに持つことができないのは、華美なことに出費を割いているからである。よくよく思案せよ。これ以下の条では馬の天性と昔の武士が馬を持ち易かった理由を記す。先ずこれを読んで、昔のことを知れ。

○馬は元来山野の獣である。野草を食らい、水を飲み、風雨を受けて生を遂げるものである。このことを常に意識して、野草で飼育した馬は、姿形は枯れたように痩せていて見苦しいけれども、人を背負って奔走する力は、天然にして馬本来のものである。このところを会得して飼育すれば、現代のようにあれこれと物入手することもなくして、人々が馬を持ち易いものであることを理解せよ。

○昔は小祿であっても武士でさえあれば、必ず馬を持っていた。もつとも持てる理由があったのである。その理由と云うのは、繰り返す述べてきたように土着であったからである。土着であるから、秣^{まぐさ}に事欠くことがない。時には糠^{ぬか}、大豆、麦、稗等を与えるにせよ、自らの手作物なので、他所から仕入れる必要もない。爪、髪、四足等も自分で手入れするので、別当、口取りなどと云って別に人を雇い入れることもない。

このようであるから、小禄であつても馬を持てたのである。今の世でも百姓を見よ。わずかに田畑の四〇六反（約四千〇六千㎡）しか持たない者でも、馬を容易に持てるのである。これは土着だからである。また昔の軍役に、六貫一匹と定めたことがある。六貫は今の知行で約六十石である。これ程の小身であつても馬を必ず持つていたのである。今の世では六百石であつても馬を持つことは難しい。その理由は何度も云つたように、全ての武士たちが知行所を離れて、それぞれの主君の城下に居住しているので、人が集るに従つて万事が華美になった。その華美に慣れて馬を飼うことも、古来の意義をほとんど失つてしまった。又、近年になつて馬役という云う者ができて、代々の家業として馬の事を司るのが世間一般の風習である。しかしながら、この馬役と云う者は、あくまで凡俗の匹夫なので、古来の意義などは夢にも知らず、ただ当世流の馬場乗りをするだけのことである。そうであるから、ただ単に口向くちむき、足振あしふりを大秘訣と心得るだけであり、全てにおいて武用の真法を失つていのである。又、人の君主たる者、政まつりごとを執る者等にも俗人が多いので、このような亜流を改めようとする意志もなく、馬の事はその馬役に一任しているので、自然と馬役等に權威が付いて、何かよく分からないが、その言うところを人々が用いるのである。つまるところ、武術が衰微して武芸を一部の芸達者に任せるので、このようなことに成り果てたのである。さて、馬は武備の根本である。そうであるから異国では千乗の国、万乗の国等と云つて、車馬の数によつて諸侯の大小を定めている。今の世で幾万石と云うようなものである。又、大司馬と云う官位も総大将のことである。それを総大将と云わずに大司馬と云うことも、馬が軍務の根本をなすので、兵馬を司る役と云うことを強調して司馬と云うのである。昔の日本でも左右の馬頭むまのかみがあり、左右の馬寮を司つていた。これは大将に次ぐ官位であつ

て、甚だ重い職務である。とうてい現在の馬役のような、凡卑に務まる役職ではなかった。これらは皆、馬というものを重んじていたからである。このように大切である馬を、凡俗で卑しく見識が狭い馬役にのみ任せておいたのでは、ほとんど物の役に立たないだろう。心ある君主や政を執る者は、方法を大昔のやり方に習ってあらゆる工夫を加え、乗り方を定めて馬を調教しておくべきであり、これを高位高禄の者は云うに及ばず、全ての馬を持つ者が常識とすべきである。そこで先ず、今の世の馬には（昔の馬に比べて）欠けている点が十六あることを知らねばならない。これを知って調教すれば、馬術もその本質をほとんど失わないであろう。一には普段の責馬（馬を乗りならすこと）の法があまりにも拙い。責馬は毎日乗るのが最も良い。四つの乗り様がある。馬場乗り、遠乗えんじょう、当て物、乗廻しである。二には普段から上等な食糧に慣れているので、たまたま粗末な食糧で飼育すればこれを食わず、すぐに疲れるようになる。三には遠乗を仕込んでいないので、まれに遠乗をすれば早く血が下り、あるいは息が尽き、あるいは食わなくなつて役に立たない。四には普段は口を取らせあぶみを押しさせて乗り降りするので、独り乗りをすれば馬が動いて乗り難い。五には普段風雨寒暑にあてていないので、これを犯して行動させれば、疲れたり病気になる。六には普段山坂で乗っていないので、曲がりくねつた山坂の道に苦しみ、すぐ疲労する。七には騎射を教えていないので、たまたま弓・鉄砲・太刀打ち等を馬上で実施すれば、驚いて駆け出す。八には鳴物に慣れていないため、音声に驚き易い。九には目立つ物を見習わせていないので、彩色や異形に驚く。十には水馬（馬が泳ぐこと）や船に熟達していない。十一には糠や大豆を多く与えて肥え過ぎているので、すぐに汗をかき、すぐに疲れる。十二には普段靴を履かせて乗るので、たまたま素足の

まま乗れば、足裏を痛めて奔走が不自由である。十三には普段から同居、同食等を教えていないので、馬同士が近寄れば、咬みついたり蹴ったりして騒ぐ。十四には牝馬を見慣れていないので、まれに牝を見れば躍り跳ねる。十五には溝、堀切、岸等を飛び越えることを知らない。十六には馬甲の類を見習わせていないので、これらの物を装着することができない。馬甲は軍用で最も重要な馬具であるから、決して忘却することがあってはならない。これら十六項目は全て、当世の馬に欠落しているところである。武に任ずる人であれば、大小高下を問わず、常々心掛けておくべきことばかりである。

これより十六の仕込み方を記すので、さらに考察せよ。又、近年馬乗りの家では軍馬の伝と云うものが作られて、これを大秘訣として、起請（＝物事を企て、上申してその実行を上級官司に対して請うこと）に起請を重ねて相伝している。甚だしきは公儀（＝朝廷、幕府）に達し、広原に幕などを張り廻らせて相伝することもある。いかに世の中に武術が衰え廃れたとて、これ程おかしなことがあってはならない。何とも恥ずかしい限りである。少しでも武術に着目したならば、別段に軍馬の伝などと云うことも、無用のものであることが分かる。ただ古戦軍記等を多く見聞して、昔の武士が馬を自由自在に取り廻していたのを手本として、利害得失を考えてみればよい。義経が鴨越ひよどりいへを下ろし、又は渡邊において海を泳がせ、かつ又新田義宗が足利家を追って、坂東道四十六里大道七里半＝約三十km余りを半時で追いついた所業などは良き師範である。この心掛けを基本にして、各人が好みに合わせて、物の役に立つように仕込めばよい。巻初から繰り返し云ってきたように、馬は武士の足であるから、先ず何よりも考慮すべきことである。これを怠ってはならない。

○馬を仕立てるのに二つの方法がある。一つは牧場を設けて野子を仕立てるのである。もう一つは厩うまやじ子である。二法ともに世間一般に行なわれていることなので、今さらその説を述べるには及ばない。ただ国の寒暖によって、少々手立てに相違があるまでのことである。さて又、一国一郡をも領する人は、自国において馬を仕立てたいものである。『春秋左氏伝』に僖公十五年 異産に乗っているのをそし 諺ことわざっていることから分かるであろう。異産とは、他国の馬のことである。

○今日の馬場乗りは、昔の庭乗りの遺法（＝名残の方法）である。前述したように、古の武士は皆達人であることを本分として、やたら乗りを第一としていたが、饗応あるいはなぐさみの為などに、貴人、高位の前にて馬に乗るとき、やたら乗りではその様子が見苦しく、その質も野卑であることから、庭乗りの方式で乗ることも武士の嗜たしなみとするようになったのである。本間孫四郎が馬場殿の庭上に龍馬を乗りこなしたことなどを考えてみよ。そうは云えども、現在のように一概に馬場乗りのみを馬術と心得ていたのではない。やたら乗りを基本として、余裕があれば儀式の乗り方をも学んでおいたのである。これが武馬（＝武士の馬術）の順道である。

○馬場乗りも今の世の仕方は、その一を知ってその二を知らないところがある。その理由は口向、足振のみを重視して、当て物（＝合戦における乗馬）の術はきわめて疎かである。そうであるから、馬場乗りにおいては上等な馬であっても、物に恐れるために戦場では乗ることができないこともある。これは平素から当て物をしていないからである。これがその一を知ってその二を知らないところである。思慮すべし。

○馬は天性として驚き易いものである。このことから「敬」と「馬」の二文字を合あわせて「驚」の字が作られたのである。その意味は推して知るべし。すでに上述したよ

うに、口向、足振がどれ程見事であっても、物に驚く馬は、ほとんど物の役に立たない。古今馬の物怖じによって損害を受けた例が多い。注意せよ。これ以下、馬の乗り方について十六項目を記す。熟読して眠気を覚ませ。

○現在では細くて長い地面を馬場と名付けて、馬に乗る所としているが、これ又真の馬場と云うものではない。真の馬場は、狭いものでも六〇七町(約六五四・五〇七六三・六m)四方、大きなものでは百町(約十一km)四方にも構成して馬のみに限定しない。人馬と器械を備えて練兵する場所とする。これが真の馬場である。

○馬場乗りは上述したように、庭乗りの名残の方法であって、馬に行儀を教えるまでのことであるから、現代流の馬場であっても事足りるのである。先ずその乗り様は口向と足振を重視し、馬に振りをつけて行儀を教えることである。ただし多く乗ってはならない。ただ馬の行儀を崩さないためだけに少しずつ乗っておくのが良い。

○二には遠乗である。これは近くて三〇四里、大道で五〇六里(約二一〇二四km)である 遠ければ百里大道で二六〇七五里(約一〇六四八km)である 百五十里大道で二四〇五里(約九六〇百km)である も乗れ。このように大乘しても馬が疲れないようになるのがその究極である。これには五段の息、三段の汗、又走足、躍足、千鳥足、鹿子懸け等の足色、また息合葉にもいくつか方法がある。精密なこと

のようであるけれど、しばしば乗っていればこれらの事も自然に会得することができる。その証拠には古代、文字が読めなかった数万の荒武士でも、如何ほどもなく各々右に掲げた数件をちゃんとわきまえていたではないか。ただ頻繁に馬に乗って、乗りながら覚えていったのである。これ以外に秘訣はない。ただただ乗ればよい。

○三には当て物である。これには例の大馬場においてはた旗、鐘、太鼓、よろいかぶと甲冑、弓、銃てっぽうの類は云うに及ばず、たいまつ抜き身の刃物、松明等、それら以外にも異類、異形の物まで

一面に立て並べ、乗る人も甲冑を着用し、馬上において弓や銃を発し、太刀打ち、鎗打ち等をせよ。これこそが馬の調教で最も重要なことである。このように調教しておくことは、合戦の馬だけではなく、平素の乗馬でも右記のように仕込んでおけ。これは馬に乗る者が慎んで行なうべきことである。これを真の騎射騎術と云うのである。『春秋左氏伝』にも僖公二十八年 虎の造物を陣前に押出し、敵の馬を威して踏破ったという事例がある。慎むべし。

○四には乗廻しである。これは早足に乗らず、地道に乗って三十里(約一二〇km)、四十里(約一六〇km)、五十里(約二〇〇km)を乗廻し、馬の気力を養っておくことである。

○五には強風、雨、雪等、又は酷寒酷暑の時節に終日乗廻して、このような悪天候に馴らしておけ。普段は箱入りに仕込んでおいた馬を、急にこれらの悪天候に曝せば、たちまち疲れて、病気になるものである。

○六には山坂や幾重にも曲がりくねった山道を乗廻して悪路に馴らしておけ。必ず平地だけで乗ることがないようにせよ。

○七には騎射を十分に仕込んでおくこと。しかしながら当世流の騎射ではない。第三項目で述べたように、馬上での荒技あらかげのことである。当世流の騎射のことは、この先で詳しく論じているとおりである。

○八には貝、太鼓、銅鑼どら、鐘かね、喇叭等らっぱ、その他種々の鳴物を馬上で打ち鳴らして馬の耳を鍛えておけ。オランダ流は鐘や太鼓を馬に取り付け、馬上にて打ち鳴らす。日本でも昔、旗持ちは皆馬上において旗を持ったのであり、今も朝鮮では馬上旗である。

○九には甲冑は云うに及ばず、旗、指物ほろ、母衣ほろの類、又は抜き身の刃物及び松明等たいまつを馬上に振り立て、馬の眼を馴らしておけ。

○十には川渡し、水馬等を仕込め。もつとも船に載せて水上を往復し、あるいは船から水中に追い下ろして、船で引きながら泳がせること等も教えよ。

○十一には中肉になるように飼育せよ。肥え過ぎた馬はすぐに汗をかき、早く疲れてしまうので、遠乗りするのに不利である。絶対に肉を多くつけさせてはならない。

○十二には平素から徒足にて乗るようにせよ。沓を履かせて乗るのを習慣としてはならない。松前は藁が無い土地なので、馬に沓くつを履かせることがない。その地は酷寒で石地であるが、足裏を痛める馬はない。これは石になれて足裏が堅硬になったからである。平素岩石山で働く人の足裏が土踏まずまで皮が厚いようなものである。

強いて足裏を痛めたならば、金履の伝がある。その方法を頭注に記す。
〔頭注〕五陪子十匁(三〇・七五g)、鉄屑十五匁(五六・二五g)、胡粉(鉛の焙りかす)六匁(二・五g)、山薬七匁(二六・二五g)、これら四つを細かい粉末にして、鉄漿により膏薬のように煉り合わせて、蹄裏に貼る。明日に乗るのであれば、今宵に張って沓を履かせておくのである。

○十三には平素から同居同食を仕込んでおくこと。昨今の馬はこれに慣らされていないので、馬同士が近寄れば咬みついたり蹴ったりして騒ぎ、大いに不自由なことになる。上記のように仕込んでおけば、軍中等においては五匹も十匹も一つの厩に追い込んでおくことができ、便利である。

○十四には牝馬を見馴なれて、牝に近づけても飛び跳ねないように仕込んでおけ。今どきの馬は、ほとんど牝を見馴れていないので、まれに牝を見れば飛び跳ねる。甚はなだ困ったことである。また大昔には日本でも支那でも牝を乗馬に用いていた事が諸書に見られる。今も相馬家の武士は牝に乗ることが多い。これは古風の名残である。

○十五には溝、堀、切岸等を飛び越えることを教えておけ。これらを平素から教えておかずに、事に臨んで急に飛ぶことなどは、絶対にできないことだと知れ。オランダ流乗馬の形では、堀を飛び、土居を超え、又は馬に立って歩かせることなどを仕込んで

しておくのである。精緻であると云えよう。これらも又、仕込んでおいて損はない。

○十六には時々馬甲うまかぶとを着せて、遠乗りをせよ。これ又平素から実施して見習わせなければ、着せた馬も驚き、傍らの馬も驚くものである。何よりも馬甲は軍用の馬具で最も重要であるから、武備に係わる者は心掛けて製作しておかなければならない。

右の十六条は馬の調教でも特に重要なことである。断じて私の杜撰な無駄言ではない。武を以て任ずる人は怠ることがあつてはならない。これ以下、馬について二三のことを記す。さらに工夫を加えて仕込むようにせよ。

○今の世では馬をいたわることを第一として、二日や三日の間隔で少しずつ馬場乗りを行なっているので、馬は気ままであつて手なずけるのが難しい。上述したように四つの乗り方を確立し、毎日乗るようになれば、馬の気質も和らいで乗り易い。古い老人が語ることには、馬は飼い殺せ、乗り殺せ。子弟は教え殺せ、叱り殺せ、と云うことである。卑俗な諺ではあるが、道理に適っているところもある。

○日本と支那では古今を通じて相馬あまげうまの説というものがあり、色々難しいことを論じている。先ずは五性けいろぎんみ十毛しやうにあう、相性しやうにあわ、不性しやうにあわの説、又は旋毛つしけ、齒牙等の評論に様々あるが、つまるところは過度に學術化したものであつて、さほど軍用の馬に関わることはないので、高貴の人は物好きが興味を持てばよい。平士へいし（＝身分がさほど高くない武士）の馬は、あえて吟味するに及ばないことを知れ。ただ脚や爪の強靱さを貴ぶだけで十分なのである。

○大昔の戦場で、あるいは敵を駆け破り、又は川を渡す時などは、強い馬を前に立てたと云うのも、あるいは不悍ふかんの馬（＝勇猛ではない馬）、又は牝馬等が多かつたからであると理解せよ。

○今の世では肥えてふくれ、毛の艶つやが良い美馬でなければ、武士は乗らないものだと
思うのは、もっての外の間違いである。巻初にも云ったように、手飼の荒馬に乗った
ところで、少しも用件が欠けることはない。もちろんその外見を恥ずかしく思うよう
な態度もあってはならない。その昔、源頼朝の池月、磨墨するすみ、義経の太夫黒こく、北条高時
の白浪などごとごとしく評判であったのも、傍らの毛艶が悪くて瘦形やせがたの馬と比べ
て見たので、名馬と称されたこともひととき強調されたのではないかと思われる。

○優れた馬に三つあるということが、『武備志』に書かれている。よく高峻たかみ（＝高く
て険しい山道）を登り降りするのがある。よく敵陣を踏み破るのがある。遠路で疲れ
ないのがある。これらに優れているかよく試しておき、それぞれに用いるのである。

○水を泳ぐにも、馬によって上手と下手がある。よく試してから用いるようにせよ。

○世の風潮が奢おごるにつれて、人々は三〜四歳の若馬を好むようであるが、若馬は軍用
には役に立たない。武士の馬は六歳以上とするのが良い。五調※は筋骨が強く、精神
も安定しており、軍用に堪えられる。武を嗜む人は、絶対に若馬に乗ってはならない。

※五調＝五〜六歳から十五〜六歳までの馬

○熊澤了戒くまざわりようかいが説くところでは、武士の馬は口が強いのが良い。平素は強口を意識せず
に乗廻し、川を渡す時などは、得意の強口に引掛けさせて渡るようにすれば、一手際
良く渡ることになる。このことから武士とは馬を上手に乗るのでなければ叶わな
いことであるという。私が思うに、この説は甚だ良い。そうは云えども、上手は少な
く、下手は多いというのが事実であるから、自分の武芸の程度も考慮せずして一筋に
強口の馬が良いと思ひ込むのは間違いである。又ある人が説くには、戦場で乗る馬
は、少しばかり不悍ふかんであるのが良いという。その理由は勇猛果敢であって、進み過ぎ

るのを引き止め、引き止めながら乗って行くのは、その様子が見苦しくて、かつ勢いが抜けてしまうものだからである。また不悍で走るのが遅い馬に諸鎧もろあぶみを入れて誘い立て、又は鞭などを加えて進み行くのは見栄えして、かつ勢いがあるものであると、古い老人が語ったのを聞き覚えたのだともいった。そうあるのが理想的ではある。それでも上手にして強馬を自由自在に乗りこなせればさらに良い。この二つは人々が自分の武芸の実力に応じて、好きなように用うればよいことではあるが、足の代りにする馬であるからには、丈夫であることを心掛けるべきである。

○古来、乗尻のりしりの達者と云うのは、手綱に頼らず、鞍によって押廻して馬を自由自在に乗りこなすことである。これゆえに乗尻と云うのである。今は手綱の釣合つりあいを第一にして乗るので、こうした乗手を上手と云うべきであろうか。これは私の臆断（＝根拠も無く推し量って判断すること）ではあるが。

○昔の武士は馬を取扱うのに、別に口取と云う者もおらず、自分で取扱って今の世の馬子まご等が馬を自由自在にするのと同じようにして、あるいは乗り、あるいは牽ひき、その扱いは甚だ粗略ではあるが、馬をよく使いこなしていた。今どきの武人は馬場にて馬に乗ることは上手であるが、馬を扱うことは馬術も知らない馬子に及ばない。これは華侈わじりが身に染み付いて、武士の荒々しい気質を取失ってしまったことによる。乗るには乗るが、扱うことができないというのは、その一を知って、その二を知らないと言うものである。このことをよく考慮せよ。

○厩うまやは空気が漏れるようにこしらえよ。馬は熱を持っているので、空気が漏れなければ病気になる。ただし空気を漏らすとは云えども寒くせよと云うのではない。

『呉子』にも、冬は厩を暖かくし、夏は軒を涼しくすると書いてある。考察すべし。

○支那、オランダ等においては馬の鼻を裂き、鞏丸を取去ることがある。これは息を長くし、馬を強くするための術である。これを驕法ぜんほうという。甚だ良い方法ではあるが、日本では古来このような法が無くても、千軍万馬の功績は異国に劣ることがない。これを以て見れば、今さら驕法を羨む必要もなく、ただ珍しい説であるので、ここに記すことで、初学者が見聞を広める一助とするのみである。

○軍中又は遠乗り等においては、馬の全身に取り付けるべき物がある。これらが動いたり揺れたりしないようにせよ。これらが揺れ動いていると馬は疲れるものである。

○馬の餌は、野草、藁等わらは云うに及ばず、葛・萩の類、又は苦味が無い木の葉類であれば何でもよい。手当り次第、餌とせよ。食べてはならない物は、喰はみ出して食べないものである。又、河川や海の水草を餌とすることもある。菰まこもなどは特に好まれる。

○夜も現在のように寝藁を厚く敷き、蚊取り等を焚いて横臥させることは、甚だしく無益である。夜も立ったままで眠らせておけ。四〇五日に一度ぐらいわずで僅かに横たわらせてもよい。とにかく緩やかに寝させることは好ましくない。かつ又、四足すそも平素は水洗足みずすそに仕付けておけ。ただし爪根、爪裏は心を込めて洗うこと。これも四〇五日に一度は上湯で大肩から洗ってよい。又、川の流に四足を浸すことは、湯洗足ゆすそに勝

ることもある。又、血が下ったからといって休ませておけば、さらに血が下って足が不自由になるものである。血が来たならばむしろ油断せずに乗らねばならない。ただし保養のために乗ることなので、よく注意して乗るべきである。夜眼よめ(＝夜間視力)

を毎月鍛えておくのが良い。これを怠ってはならない。兎角、世につれて馬の飼いやけも華美になってしまったので、それを打破して懦弱だじゃくに陥らぬように飼育することが肝要である。この心得で飼育すれば、馬は丈夫にしてよく人を助け、人は負担を少な

くして馬を持ち易いのだと理解せよ。

○筋切については、とりわけ慎まねばならない。元来馬の外形を取り繕って高額で売
りつける馬商人のやる仕事であり、武士たる者は間違ってもやってはならない。足の
筋を切ってしまうえば、上り下りの坂道に苦しみ、尾筋を切ってしまうえば、水を渡らせ
る時に鞅しりがい（＝馬の尻から鞍にかける組み緒）が外れることがあるという。いずれにせ
よ軍用には害があることなので、武士たる者は絶対にやってはならないのである。

○鞍も今造られている形状は、昔の機能を失っているように思われる。大昔に造られ
た鞍を見ると、前輪が大きくて高く、乗間のりあいが甚だ広い。今造られているものはこれに
反している。どうして戎服じゅうふく（＝戦うときに着る服・具足）の鞍と常服の鞍とを区別す
る必要があるのか。なお縉紳しんしん（＝官位が高く、身分のある人）家に要求せよ。又（武
家礼法の流派として）皇都に石井家があり、東都に伊勢、辻の二氏がある。これらの
人々を問うて精詳（＝細かく詳しいこと）まで実施せよ。

○馬を持つ者は、少しでも療養の道を知っておけ。そうは云えども深遠の術を苦しみ
学ぶには及ばないことである。ただ血を刺し、夜眼よめを焼き、あるいは虫気、腹痛、打
身、挫き等の薬を知れば事足りるであろう。これ又、馬を持てる者の嗜みたしなである。巻
末に突然のことに備える薬方二、三を記すので、暇な時にでも学んでおくこと。

○安永四年、私は長崎に滞在中であり、支那やオランダ等の人たちと面談することが
多かった。その中でオランダ人の馬術が上手なアアレント・ウエルン・ヘイトと云う
者と対話した。彼が説いた数々のことがらには、取入れるべきことがいくつあつ
た。一つには馬は前が高くなければ乗るのが難しい。今の日本流の乗り方を見ると、
馬を前高にさせるため、鞍から引立て、又は手綱によって口先を引上げて乗ってい

る。しかし、これは上手であれば手鞆も利きくので、その人が乗っている時には当然のことながら向高むこうだか（＝向かう方が高いこと）になるけれども、手鞆の弱い下手が乗る時は、持前の向低になって、乗り難い。これは馬を向高の体形に育てなかつたからである。オランダ流は馬を向高に育てておくので、幼児を乗せたとしても前が下がらないという。さて、そのように育てる方法であるが、二歳の時から厩において、草を喰わせるのに、馬の首よりも高く格子を構え、その格子の中に草を入れ込んでおけば、馬はその草を喰おうとして、伸び上がりながら草を噛むので、成長するに従って、いつの間にか向高になるのである。又云うには、向高にさせようとして、無理に前方を立てるならば、口先だけがやたらと上を向いてしまう。口先がみだりに上を向けば、馬の気合が失われて物に驚き易くなり、その上足元が見えないので躓つまずくことが多い。オランダ流は首だけを高く保持させて、口先は下げて北斗（口元のことか？）を引締めておくのである。北斗を締めることを奥羽の俗語でひげを付けるといふのである。北斗を締める術は轡くつわの製法にある。このように仕込めば、気合も留まって物に驚かず、足元が見えて躓かないと云われる。なんと奇抜な術であることか。



舍を山形にして横にあく也
仕かけて手綱を引しむれば舍
先下りて舌を押故北斗をしし
め口をもむすふなり



右の轡を暇な時に製作して試みよ。よく口を結ぶものである。私はこれを見ている。

○全て馬上の組打、その他達者が行動するには、あぶみ 鐙を踏み張って、立ち上がらなければ難しいものである。しかしながら当世は鞍を張り、馬をせり立てて歩かせることを第一として、馬場乗だけを稽古するので、鐙を短く掛けて乗っている。これは武用（軍用）としては甚だ避けるべきことである。その理由は短い鐙に乗り、立ち上がった行動すれば、鞍との隙間があつて踏み固めにくく、自分の体が弾んで前に倒れたり後ろに反ったりするものである。試してみよ。又昔の戦記物語等に、敵のかちむしや 徒歩武者を鐙の先端部に当てて倒すと書いてある。これは短い鐙では為し難い動作である。今も朝鮮人、オランダ人等の馬術は何れも立ち鞍である。又蜀の玄德ももも 股に鞍づれがあつたと云われる。これらは皆、長鐙の証拠である。今日でも馬術に励む者は、短い鐙に乗ってはならない。

○巻初より繰り返し述べてきたように、当世は走る馬から矢を発射することだけを騎射と心得ている人が多いけれども、大昔の騎射と云うものとは大きく異なっているのである。大昔、騎射の達人と云い、又は馬術の上手と云うのは、馬上で弓を射るだけに限らず、全て馬を自分の足のように心得て、険阻、山坂と云えども馬から下りることがない。溝を越し、堀を飛ばせることも甚だ自由であった。その弓は射る対象を見るや、弓手（ゆんで）の敵を射るのはもちろんである。馬手（めて）の向筋違（むこうすじちがひ）をも射て、又後ろを向いて矢を射たのである。そうして矢種が尽きるか、あるいは敵が近づけば、弓を収めて太刀打ちをし、または引組んで自分の鞍壺（＝鞍の中央部分）に引きつけなどしたのであった。これを馬術とも騎射とも云ったのである。さて今の騎射は、昔の流鎗馬（やぶさめ）の遺風であり、儀式の騎射である。ただ神事や饗応等に用いるだけであり、敢えて武術とは云い難い。その事の起こりは、古代処々の神事、祭礼に神勇（かみいさめ）の目的で社人、神主などが射た事である。それゆえに、今も古い神事には皆、流鎗馬があるのだ。これが当世の騎射の始まりであり、騎射と云う名目は同じであるが、儀式を大本にしている射形なので、武術の騎射とはその形態や技術において精粗剛柔の差異があることを承知せよ。

○古代の騎射は右に述べたように、ことごとく達者であったことも、大昔は都には鼓吹司（くすいし）、国々には軍団があつて、兵馬の動作を教え、又犬追物、牛追物、あるいは戯道等といった人馬の大規模な機動訓練が度々あつたので、その風潮が天下に広まつており、諸国の武士は皆、馬術に達していた。こうした事をこそ真の騎射と云うべきである。当世においても各禄に応じて養つておく人馬であるからには、右の心持で仕込んでおきたいものである。全てこの一卷に述べているように仕込んで育てた馬を、

無事太平のために役立たせることは容易である。又当世の馬のように、華美や奢侈に染まりきって騎術その他、荒っぽいことに慣れていない馬を、にわかには荒事及び戦場等で用いることは、絶対になし得ないことである。ただ兎にも角にも養っておく人馬であるからには、上述したように仕込んでおいて、不測事態に役立てるよう備えておこうとすることが重要であり、これを武備と云う。国の君主や執政に当たる者は、このことを忘れることがあってはならない。

○右の馬術についての数々の説は、二百年來の平和な治世に生まれて、俗習だけを伝授している馬乗りの輩は、一々不得心からかえってこの説を以て「馬術を知らない」と云い、あるいは「狂気乱心の所業」などと実際に思う人もあるに違いないが、それはそれで、俗習に凝り固まった凡夫であればもつともなことであろう。しかしながら、もつともだからとて不決断を生じ、これらの凡夫の輩に任せておいては、物の役に立たなくなるので、凡夫は凡夫なりに理解させ、納得させるようにせよ。馬は馬なりに物の役に立つように仕込むべきことは又、この上での決断にして、きわめて肝要なことであるから、君主の明断、改弊の経済、武備の活発を仰ぐところである。

急用馬薬の製法は左記のとおり。

牛馬平安散 不食、腹痛

烏梅 黄栢きはだ 甘草 楊梅皮 各三十匁
(一一・二・五g)

莪朮がじゆつ(朮じゆつ||おけら) 三稜 各十九匁
(七一・二五g) 大黄 十二匁
(四五g)

右を細かく粉末状にしたものと梅干の肉を水にすり立て、一度に五匁(≡十八・七

五g)用いる。○又右の薬法を一点五匁程に調合し、梅干三つを入れて水で煎じて用いてもよい。

人虫丸 打身 五淋※ 小便閉 糞詰

※注 五淋⇨排尿時の膀胱・尿路に関する五つのトラブル、石淋、気淋、膏淋、勞淋、熱淋

人虫 二両(約七
五・六g) 龍腦※ 一両(約三
七・八g) 活萋根かつろうこん(萋⇨よもぎ) 一両(約三
七・八g)

草撥 半両(約十
八・九g) 甘草 一匁(約三
七・五g) 水銀二朱

※注 龍腦⇨龍腦樹という木からしみ出た樹脂が結晶化したもの。呼吸機能を高め、意識をはっきりさせる働きがある。

右を細かく粉末状にしたものと米糊ふのりに鹿角菜を混ぜ合わせ、龍眼ライのよ(⇨うな果物)の大きさに丸め、葛粉を表面にまぶす。これを打ち砕いて飲ませるのである。飲汁には数種類あるので、それぞれの方法で用いよ。○筋病にドクダミを煎じた汁
○打身に赤地利(⇨シャクチリソバ、インド北部から支那が原産地)を煎じた汁 ○尿閉に木通あけびを煎じた汁 ○大便詰かやに榧かやの木(⇨碁盤や将棋盤の材料)の汁とニワトコを煎じた汁 ○息切れれいろに藜芦(⇨ユリ科の多年草、薬用植物)と人参を煎じた汁 ○中風(⇨脳出血などによって起こる半身不随、手足の麻痺など)にドクダミを煎じた汁
右は何れも薬丸を打ち砕き、この汁にかき混ぜて用いるものである。

足痛

活萋根、カラムシの根、芥子からし

右の三種を等分に混ぜ合わせ、食塩を少し加え、痛む所に塗りつけよ。

背摺ずれ

松魚かつを(⇨鰹) 黒焼、黄栢きはだ(⇨おうばく)、烏賊いかの魚甲、

右を等分混ぜ合わせて細かい粉末にして塗りつける。

擦り傷

牛皮、犬頭

右を黒くなるまで焼いて細かい粉末にし、胡麻油に混ぜて塗りつける。

血が下った時の塗薬

からし、野からむし、かわらげ、塩、

右を等分に合わせて細かい粉末にし、酢に混ぜて足に摺り付ける。

内服薬

人参 茯苓 (||松の根などに寄生するマツホド菌(サルノコシカケ科)の菌核を乾燥させ、外皮を除いたもの)

乾姜 (||乾燥させたは、陳皮 (||ウンシユウミカン又はマンダリソレンジの果皮を乾したものを)

右の細かい粉末を酒に入れて、七〜八匁(二六・二五〜三〇・g)ずつ、一日に二度

飲用する。病が治癒するまで服用せよ。

糞詰り

牽牛子 (||アサガオ) 一匁(三・七五g) 大黄 (||タデ科ダイオウ属の薬草) 一匁 射干 (||檜扇という植物の漢名) 二匁(七・五g)

右を細かい粉末にして酢あるいは鉄漿に混ぜて、七〜八匁(二六・二五〜三〇g)を服用する。また水で煎じてよい。

寒気中、不食、戦慄等に用いる薬

白茯苓 (||二十年以上の松の根 元寄生するキノコ) 木香 (||キク科の植物) 茴香 (||セリ科ウイキョウ属の多年生草本) 乾姜

柴胡 (||セリ科の植物) 前胡 (||セリ科の植物) 村立 (各三匁(十・一二五g))

獨活 白朮 (||オケラやオオバナオケラの根茎を乾燥したもの) 蒼朮 (||キク科ホソバオケラの根茎を乾燥したもの) 葛粉

羌活 (セリ科のキョウカツなどの根や根茎を乾燥したもの) 黄栢 楊梅皮 (各二匁(七・五g))

川芎 (||セリ科川芎の根茎) 陳皮 白微 (各一匁(三・七五g))

味噌を少し加えて水で煎じて服用する。

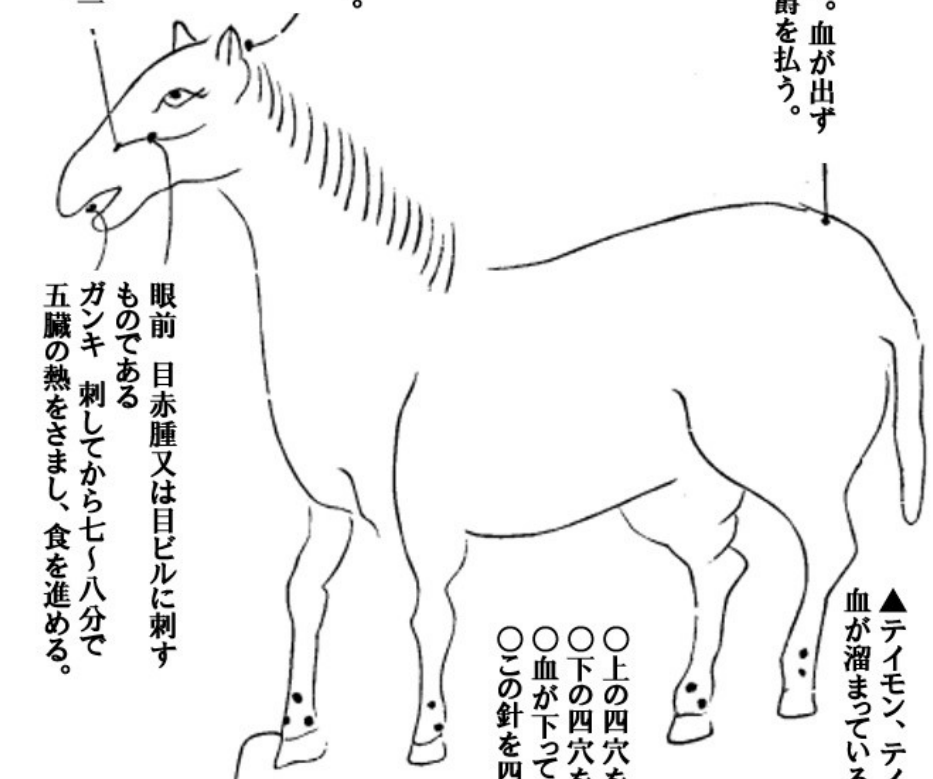
刺法大略

百会 針だけを刺せ。血が出ず
万病によし。併せて爵を払う。

刺法大略穴所

八用 針だけを刺せ。
血が出ずに万病に効く。
併せて爵を払う。

コウモン 刺してから二
分以内に乱を静める。



▲テイモン、テイトウ 八穴の内、
血が溜まっている所の四穴を刺せ。

- 上の四穴をテイモンと云う。
- 下の四穴をテイトウと云う。
- 血が下って足が痛いのを刺せ。
- この針を四血(穴)の針と云う。

芝引
捻挫に良い。
血が落ちて足裏が
痛むときに良い。
四血を取っても痛
みが引かないとき
に良い。

眼前 目赤腫又は目ビルに刺す
ものである
ガンキ 刺してから七、八分で
五臓の熱をさまし、食を進める。

右の数条は、応急的な馬の治療についての概要である。その病がさらに重くなったならば、伯楽家(馬医)がいるので任せよ。また場所によっては、馬を捨て去ることもある。時宜によって判断せよ。